千五百番歌合

千五百番歌合

百首謌合　建仁元年　土御門院御宇

題

春　廿首　夏十五首　秋　廿首

冬　十五首　祝　五首

雜　十首　戀十五首

作者

左方

白房　後鳥羽院

左大臣正二位藤原朝臣　後京極摂政

前權僧正慈圓

從二位行權中納言藤原朝臣公經　德大寺左大臣

參議正三位行左近衛權中將兼越前守藤原朝臣公經

正三位行皇太后宮大夫藤原朝臣李能
宮内卿　坂島羽院女房
讃岐　二条院女房頼政女
小侍從　待宵
敕位正四位下藤原朝臣隆信
敕位正四位下藤原朝臣有家
敕位從四位上藤原朝臣俊李
正五位下行左近衛權少將藤原朝臣良平　醍醐入道前太政大臣
從五位下行左兵衛佐臣源朝臣具親
僧顯昭
右方
三宮

内大臣正二位兼右近衛大將皇太弟侍源朝臣
正二位行權大納言藤原朝臣忠良
從二位行權中納言藤原朝臣兼宗
從三位行右近衛權中將源朝臣通光
沙弥釋阿
俊成卿女
丹後
越前
正四位下行左近衛權少將兼安芸權守藤原朝臣定家
正四位下行左近衛權中將源朝臣通具
從四位下行上総介臣藤原朝臣家隆
從五位上行左近衛權少將藤原雅經

沙弥寛蓮
従五位下行右馬助源朝臣家長

判者

権大納言忠良　春一　同二　夏一　同二　秋二　同三　冬二　同三　戀二　同三

内大臣

女房

季経入道

顕昭

釋阿　春三　同四　夏三　秋一

左大臣

定家朝臣　秋四　冬一

師光入道　祝一　戀一

前権僧正　雜一　同二

千五百番歌合巻第一　判者忠良　春一

春二十番

一番

左　侍

春てはかりあるやそとりはしめ乃霞

右　女房

いはしのはてやそ年毋春のはるん雪の消ぬてうしの

左方人詞ゆ[illegible]

春てはかりあるやそとりはしめ乃霞

右方人詞ゆ[illegible]

二番

左勝

[illegible]

右方人

後京極
さしるへてけさは霞の立きりや なにはともなく春のくる跡
歌にめて竹に流るゝ音の外の夜や春のよふかく
右　　貞信
右哥おもしろくも侍らねと
左哥は詞いきほひあるれは一為勝歟

三番
左　持　　前権僧正慈円
雲晴らは春はきぬへき吉野山 花とやいはん雲とやいはん
右　　権大納言忠良
咲ちりて桜の花の吉野山 花や春に逢坂乃関
左右共にやいかんとしやいかんといふ字
心詞ともにかさなりによりて一為持

四番
左　持　　権中納言公継
風のすむ霞の空にかすむ夜は春はさかりのまた遠き
右　　権中納言兼宗
春きぬとされは岩間の氷のとけけるにも
左右ともにふるまひしたてたる事なし一為持

五番
左　　参議公経
桜の香は風も世には逢坂や関の戸の春の曙
右　勝　　右近権中将通光
花散らは雪けの空の跡かれて緑はつる春の初雲
左の哥は花の春の曙心もとなかりしく

雪ゆゑを山立あるきまつれ弱といふ言をあも
へるうやうしかゝ石門はあ波岩のうゑハな
つゝもやうやう又石門なるてをいたゞを
いろんまつ いろんへるへうんん門と
ゞとハゝとある拙まうを絡めし弱又字も
いろく書ゝうゆや絡ん右を書けり雲
の絡をしてを絡うゝ雲小してとあうま
りゝくゆのく絡まとけりてあはつるゑ
るゑかうしを絡絡ゝん

六番

尤

山さとやはへの氷こけめん

大曾太后宮大夫季能

雲風うゝおうゝきゝ乃こゝ

右 勝

秋阿

八重霧八千潟うゝて立よゝあゝ代のゝ花を乃曙

尤 寄風うゝうゝ絡きのこゝを絡ハし

東方朔傳ゝ朝日風從東方来鶴順風

而立是以知其東嚮鳴也といふるゝまや

右哥姿ますゝり絡ゝ筆

七番

尤 持

宮内卿

いろゝゝと春の日新ゝ雪消てゝゝゝて絡る遥乃松風

右

後成女

ある日の雲を立る天川空ゝ乃世の春のゝゝめハ

尤めゝゝきゝ雨ゝ絡まとゝゝて絡ゝと

ことばにつきて申し侍りや右させる難なけれ
と祝の心あるハいつも勝るべきとやいふべし

八番

左 持　讃岐

雲井より春やたつらんあさ緑しあまの原に霞そめぬる

右　丹後

明るまてしもやおかぬかしとけさそ難波の浦ハかすめる

両首の霞勝劣不分明にて持とすべし

九番

左　小侍従

去年といふ明るよりなる空の霞ハ今年そたてる也なく

右勝　越前

おりと春たつけしきハ見えくもるあけほのゝ空

左去年といひ今年といへるすこし耳にたちや侍らん

右めつらしき事なけれと難なくハ侍し

十番

左持　散位藤原朝臣隆信

あさみとり空の霞の吉野山にもきたりし春のかよひいハ

右　藤原朝臣定家

春の夜の明るけしきもやすらふの山越ゆくらん

左右させる難なく侍りや左右の山を越

さるらんとみゆる縁勝負なくや申べからん

よろしく侍りてなん持歌

十一番

た　勝

散位藤原朝臣有家

山の[illegible]紙[illegible]て出るものとしにめらるる代のかつの春

右

左近権中将源通具

年をこそ[illegible]やうそ[illegible]梅[illegible]まつ山

右方[illegible]や年[illegible]ん[illegible]

十二番

た

散位藤原朝臣保季

年[illegible]て一枝[illegible]る春[illegible]

右　勝

上総介藤原朝臣家隆

[illegible]の[illegible]春[illegible]

た[illegible]一[illegible]

[illegible]

鳴[illegible]

十三番

た　持

左近衛権少将藤原朝臣良平

春[illegible]

右

左近衛権少将藤原朝臣雅經

鳴[illegible]

た[illegible]

[illegible]

十四番

た　持

左兵衛佐源朝臣具親

年の[illegible]春[illegible]

右

[illegible]

春の日の山もとかすみたちにけり
たかき梢にうぐひすぞなく

十四番　　僧顕昭

左

和歌所にて寄霞恋

右　持

こずゑの春の山風にこそ
たちまさりけれ

右馬助源家長

左

ながめつるきぬぎぬ
なりや春の夜の

十五番　　女房

左　持

あけぬとてかへるさ
ぬぎの袖の上に

右

君をこそ思ひ出
たよりとすれ

四番　　左大臣

たよりとしてぞ
ながめ侍りける

十七番　　左大臣

左　持

おちたぎつ岩間
の水の

右

春風や氷とく
らん

恵良

たちまさりけ
れ

ながめやる
ものの山ぶ

ながめつる
ものの

十八番

た 後

春風のしきりに氷解けいたるやうの神もひらるん

右　兼宗

あるべき月日をいたづらにてよ代のうけも軽みはるる

右　前さきの内大臣

やうやうとなれば心あるる秋なりぬるまこそ待あれ

十九番

た 持　　左 徳

のどかなる春の日にもとけぬるは氷こそ風もなかりしかれ

右　通光

くるる代のあまたてとる年とよるる花松ぬるうるるん

たとしるるるしとるるたのまるの花をさるの春

二十番

た　　左 徳

あらし吹ぬるかるるのもとがもとかたもとうる春の

右 後　　秋

雪もの代とや契年絶てるるぬるよ春ぬるつくるん

たのもとうしていとひあはせれてるやのし

うるるやたの後後るん

廿一番

た　　雪 能

一とせ絶ひとりてまもるつめい美しわるるのとう春

右 後　　後成女

四やうあ[illegible]乃[illegible]春風[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

廿二番　た　宮内

ゆく末は松浦あよ姫こ松ゝそこ[illegible]
右　持　丹後

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

廿三番　た　源汾

[illegible]
右　越前

春[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

廿四番　た　小侍従

[illegible]
右　勝　定家卿作

春と[illegible]
[illegible]

廿五番

左勝　　隆信朝臣

春きてハ人もとはぬ山ぞとの　ゆきにぞ[illegible]ぬる花の朋[illegible]

右　　通具朝臣

[illegible]

右の花の所詠春風をあく[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

廿六番

左勝　　有家朝臣

春風の三角花ハ[illegible]

右

春[illegible]

右[illegible]

[illegible]

廿七番

左　　保季朝臣

氷[illegible]

右勝　　雅経

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

廿八番　良平

左

とゝのもの紙雪をれたるふまうつ雪とみのしたる山

右　持　寧室

春きてとゝの紙雪さゆる山風のわりとよる風ふきくるゝ

左　いつま雪とみのしたる山陰こゝに挑すやうん

右　かりとよるれとおくせとゝるんをうゝく

作り物とはゝ

廿九番　奥親

左　勝

心ばりとうすきの衣を田山うゝめつしきるれ明ほの

右　家長

春風のあの〳〵れ雪紙吹うゝ花をいたゝ松のうつしゝ

うゝめつゝ〳〵れ春の曙勝侍らん

三十番　顕昭

左　持

ひめこ松ひくまれの〳〵よるゝてをとゝよる代ゝ千ゝ

右　三宮

ゝゝの松雪ふる松よ壱位てをうゝ舞ゝ春乃神風

左勝〳〵きりや侍らん

三十一番　女房

左　持

如つゝきやうゝ雨の山よ雪消てゝしし風い春れゝ河風

右　忠良

春はまさきかつらの色乃ふかくなる人ふる雪をかなしみ
流れをは乃ぶ乃来ふる間のふる雪に及へるふる行
ゆくたの橋

三十二番　左勝

よし野山雪はなをさとをしふかみ花春風そ吹

右

しらわかの雪をは春はあらしをは秋風ふる萩のやけり

右雪をは春はあらしをは秋ふるゆるすやた桂
のこしのき春風そ吹ふる行ふる二番勝

三十三番　左勝

春霞たゝはは都はなれ山のはるくゆは雪やはるく葉

右

あしくゝ小玉手代乃ふるとちる雪ふる雪もはる春霞代
右雪ふる雪をしくゝ小ゆるといたもんまやいく
行へらん地もの三ゆるとのたち行ん志ゝりもるはる
もを山乃ふる雪をとはさも行ん志ゝ行ん

三十四番　左

春はの雪ふるふるはる志なるもはるゝ春のゝ
右勝

逍遥ゝ

左

春はの雪ふるふるはる志なるもはるゝ春のゝ

秋阿

春はあさみ乃ふる志ゝ行へ野をさゆるみゝ乃ふる山
左のゝ山ともまゝ行きふる雪のゝ春日之
こゝし行ん右松をさゆる志ゝ二番勝

三十五番

た

白雪の袖ふりはらふ越の山

右 勝

雪白きてどこもかしこも花ぞかしの春風の浪越路の

右後うしろ

三十六番

た 持

うちなびく春の草木の色ぞ

右

宮内卿

春風何とへうつる雲ぬるん

丹後

宮内卿

春の日の光うけしとわとひて折るうしろ

と侍るうけあるんの白ぬきの

色日の光うけあるんの白ぬきの

めつらしねと雖あれいすれ

三十七番

た 持

くもゐの波いつちうつるかの

右

宮内卿

春風の雲ぬ空

越前

浪路より春やきるん名ぬ

ぬ空下白ぬきうつく侍るをいつちうつるくこ

ぬもとうつるやいかあるを

ぬこゆるとつるしの事也上句をあまりやすか

まや侍るんこゝの物歌

三十八番

左 持

春の雪いかなる事ぞ時やをりなる花の上かな

右

定家朝臣

山のゝ[illegible]ハいさけを春ゆゑ[illegible]空ゆく[illegible]

左の歌の雪ゆゑ[illegible]花の右いさけを

とゝ[illegible]

三十九番

左 持

小侍従

雲つくゝ[illegible]の雪の夕暮[illegible]

右

道具朝臣

雪ゆゑ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]春や[illegible]

左雪つゝ[illegible]をきて[illegible]

[illegible]

四十番

左

澄信朝臣

右 持

家澄朝臣

山里の雪の間の[illegible]て春[illegible]

左いとゝ[illegible]

四十一番

左 持

有家朝臣

[illegible]

右

雅経

晴やらぬ雲ゝ八雲けの乃雲風よ雲あきまるみのゝの　山
たゝあゝ
ゆゝ二雲
た

保雪弱尼

ゆゝひする雲ゝ
右　勝

春ゝ雲ゝ
たゝ
や右ゝ
ゆゝ三雲
た

寂蓮

ゆゝ雲ゝ
右

良平

みゝ
かゝ
たゝ
ゆゝ雲
た

家長

志賀のゝ
右

三宮

村ゝ雲ゝ
たゝ
源の三ゝ
ゆゝ雲
た

具親

[illegible]

中宮[illegible]

左持　　顕昭

春霞たなびくかぎりみよしのゝ山のあけぼのいかにをかしき

右　　[illegible]

[illegible]

左同科勝劣難決

中宮[illegible]

左勝　　女房

白雪のふりかゝるかとみるまでに[illegible]

右　　兼宗

山里は雪ふるかとみるまでに[illegible]

[illegible]

中宮七番

左勝　　左大臣

時しもあれ春の七日のゆふぐれにひとつひかれぬ[illegible]

右　　通光

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中宮八番

左持　　前権僧正

あさ霞たなびくたにのうぐひすは春の夕べを[illegible]

右　　秋阿

春毎ゝ花の雪乃ゝ代は皆我ゝ世の春のあめ
たまのめを春の雪ゝ降れとゝ云ふ人あ
みゝ作り古歌乃ゝ心地おとゝ
四十九番
左
こゝ花ゝ雪ゝ春ゝ降ゝ雪ゝ
右勝　後成ゝ女
春日野の雪ゝ紙にて貼れる春の花ゝ
たゝいをゝ雪ゝ紙にて春の花ゝ
作ゝゝ雪ゝ古歌乃ゝ心地とゝ
五十番
左　左徳ゝ

雪の中ゝ春ゝ降ゝ雪ゝ
右勝　丹後
雪ゝ降ゝ中ゝ春ゝ降ゝ雪ゝ
花ゝ雪ゝ降ゝ中ゝ春ゝ降ゝ雪ゝ
古歌乃ゝ心地
五十一番
左勝　季能ゝ
小松原雪ゝ中ゝ春ゝ降ゝ雪ゝ
右　越前
雪ゝ降ゝ中ゝ小松ゝ原ゝ春ゝ降ゝ雪ゝ
古歌乃ゝ心地ゝ

五十二番　宮内卿

た

霜しくのうひ柳濃うけてねまちうる春のうぐひす

右　後

実氏朝臣

山里は谷乃雪打つもきて霜ふりつ行る末の山

面前の雪ぬまあらうる春花雪といひ霜ふり出

末年のうぐひすとうるうぐひす後より行

た嘉しくとぬるうめ梅ひ柳ふとつきて

もゆるとなるんす右後へらや

五十三番　源成

た　持

海山出て花を捜しと思ひ牧乃雪はあく

右

通具朝臣

花つ思みぬ花つ〜いそれあ〜雪ふあ〜ふ絶れ

た詞つ〜ぬ梅よ雪し行春で右雪ふそ引

ぬ〜と袖ゆと行ぬとさふそと雪し〜あ〜

つるゆ行ん持おるとゆ

五十四番　小侍従

た　持

春とふ入るへて霞ゆつらん雪の花室花あ乃ふ月ふ

右　家澄朝臣

雪の月乃あ行ふ袋のふひ雪れ雪ふ絶れ

た右ふ〜ん〜ふ雪て袋ねゆつひ袋

五十五番

たれ　　隆信朝臣

雪ふりよめるむしろのうへにてうつもれてとうみひろ野ちのみるひとなし

右　　雅経

ふるさとのつむゆうにたれ心さし此の君のゆくすゑの春をまちえん

たれ　　みちのくにてとうしたるや野ちの雪下り雲間

みちのくにてとうしたるや野ちの雪下り雲間

極よりやまされ侍るん方の君のいとうれしう雪の

雪をみいとも心地を侍るとまた

五十六番

たれ　　入道前太

まこしとふとこの夫れ侍るかうあるん雪ふりつつ

右　　寂蓮

波のうへ雪の雪のとまるとなくん梅の山もとうくひいのしを

たしとものうるのるれとも世を捨雑方にをうしき紙

みちのおくとのとくまりくやえ法師侍るまし

五十七番

たれ　　保季朝臣

春ふれいもとうりうしこぬ燈ほ人素とこゆる遠方の浦

右　　家長

雪ふるる源氏の素八重雪ふれとあるる春のよの月

右八重雪ふれとあるる雪のよ月波よりさうて

雪のしに侍りたもとうりうしこぬ燈さとのる宣侍

五十八番

たれ　　良平

かりそめの言葉をそなへてもり月のくもの下陰なるあ
右　三宮
津國のあまの藻刈衣なんわが世に義経する身の白浪
　　西園寺勝宗卿
五十九番
た　奥親
おもてをみせぬ所をうらみんとうねめある音乃うくひす
右勝　四条院
春風のひくはるの柳のきぬ青柳のかた
たちつゝまるとみる宮のゆふ右為勝卿
六十番
た勝　顕昭

たゝかくとあぢきなくうらもとゝ人ワ世に隠くもよひろ立也
右　忠良
行末はかゝる身にうけひてあらぬ年経ぬるかをつる
たゝの結ぶつるのもとにたまゝ居の行末
六十一番
た勝　女房
あれくん新の梅と見ぬ人ぬ袖のうそ行る
右　通光
庭の面ふ物ゝる沢まて来ぬ月ひけうに言乃村消
右方心ひあり河つゝき宮ーうに出のく行り
たゝ沢宮く行り二番勝
六十二番

た　　たかこ

[illegible]

右　勝　　釈阿

神のゝ[illegible]春の[illegible]春の[illegible]

た　右　[illegible]

[illegible]

六十三番

た　勝　　お[illegible]

[illegible]

右　　後鳥羽

山里の[illegible]

た　[illegible]

[illegible]

六十四番

た　勝　　ゐ徳院

[illegible]

右　　冊後

[illegible]

右を[illegible]

[illegible]

六十五番

た　勝　　ゐ徳院

新千載

春風[illegible]

右　　越前

うぐひす春日うらゝかなりけり　おほ内さくらふきみだるうし

たゝの宮くらゐ　ちかきこのもとのうぐひすなれいたゝの勝

六十六番

たゝ　持

むらくもたれをかすみとなりそめぬ　雲雀つ

右　　定家朝臣

残花遠

消なんとすれどもゆきのとけぬるは　雪解つ

たゝとのるるゆきのしたぶるゝ　きえぬるゆきの山

とうけもりんもなつむ野もあさ雪のかゝるか

しらぬる野をしらぬ郭よい　ゆきぬ

ゆきのゆるるやはるのなごり

六十七番

右　勝

梅花遠

梅花ゆゑ袖ぬれ　白ひらと春や昔の月よとゝやゝ

たゝ　袖　文字　くしく　ぬれ　右勝　ゆゑ

六十八番

たゝ　持

抽花白ひらゝとゝ　ゆゑ　風のおもしろ

右　　家隆卿

子日ゆゑ松ゝとゝ　ゆゑ　ゆゑ　乃　ゆゑ

たのもしくゆゑ　ゆゑ　右下句

ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

たゝ　　家内卿

ふるゝ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

右　勝　　通具朝臣

梅花遠

梅花ゆゑ袖ぬれ　白ひらと春や昔の月よとゝやゝ

たゝ　袖　文字　くしく　ぬれ　右勝　ゆゑ

六十八番

たゝ　持　　讃岐

抽花白ひらゝとゝ　ゆゑ　風のおもしろ

右　　家隆卿

子日ゆゑ松ゝとゝ　ゆゑ　ゆゑ　乃　ゆゑ

たのもしくゆゑ　ゆゑ　右下句

ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

うかりし枯とをくし

六十九番

左　小侍従

春ごとに昔乃法師ゝ[illegible]

右　勝　雅経

雪さむしたすもはぎの枯ゝ[illegible]

左　[illegible]

七十番

左　勝　隆信朝臣

春さらて数のゝかつひまてよ雪[illegible]

右　家蓮

[illegible]

雪はゝ[illegible]

七十一番

左　勝　有家卿

[illegible]

右　家長

雪はらはつゝにつまて[illegible]

七十二番

左　勝　保季朝臣

[illegible]

右　三宮

[illegible]

[illegible]

七十三番

左　良平

[illegible]

右勝　内蔵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七十四番

左　奥親

[illegible]

右　忠宮

[illegible]

[illegible]

七十五番

左持　顕昭

[illegible]

右　為宗

[illegible]

[illegible]

千五百番歌合寒第二春二　判者大納言忠良

七十六番

た　勝　　女房

春風乃さそふ花乃あらしかなたてうけろと言のこゝ

右　　釈阿

春のあけぼの代柳の枝もうゑはしめ乃ひとよ嵐のしらむ

たかとゝふかとゝてくゝ結ぶふとゝてたゝ結て

うけろと結ぶまうけろと結ぶや

七十七番

た　　たゝ長

書写のきゝ次第の中のちゝわひちゝとゝもしてもわを

右　勝　　後成卿女

梅花のぬしをもしらでいにしへの春のよの月
たゞ一すぢにかたらふ空にかをるを右あり一ぢくん
の春のよの月むかしの勝とはなし

七十八番　左勝　お稙伯母

春の月ぬるかぜのつゆのあつさにていさこゝろなつかしん

右　丹坡

梅ゝにまとひしらでとてるむまを宮ばへうる春の曙

左勝伯母

七十九番　左持　二條

梅ゝにおもかげのかをるゆふぐれのつきにとまるゝ春の夜

右

打しをれぬる宮こにやまぬ春の野に袖のつゆとてゝ袖そこゝ

右　左持　ゆ

ひとて宮のとゝまるゝ心ゆゑあかしらぬ袖のつゆ

も宮こ伯ゝぬ袖とはし

八十番　左　二條

ゝらぬ花梅の白ぬゝ雪きの袖ゝそゝ花ゝみゝゝる

右　持　定家卿

若風の吹あはせける梅花わすつ宮ゝるゝゝや白

たいゝも心ゝに伯ゝの花天つ宮ゝるゝゝや白

ゝんと伯ゝゝゝ宮ゝく伯ゝゝや

八十一番

左　　　　季鷹

春ことに野への心をやるへきもなほあかすして年はつもりの

右　勝　　通具朝臣

梅かゝをおもふ袖にはうけしかとかくへきものを春風の月

左首の句の勝負なく侍れと右おもへる袖にこそ

みへけるといへる言はきこえ侍るにや

八十二番

左　　　　宮内卿

けさよりは春こそ来ぬとおもひけれ梅かゝ霞にうくひすの声

右　勝　　家隆朝臣

霞より河なみ御世のはしめそとあそふ春の花の本の宗

たかき緒ともなくもよあること実されと所詠歌之右の勝

八十三番

左　　　　讃岐

石上ふる野の小のゝ若菜つむ人はとしにおもひそふらん

右　勝　　雅経

春もきてよるよるかはる霞の袖の梅かゝに

右方下句は霞きえなきてとあるへきの字耳は

いふやうにたよりなきなれはいれすとも

霞きえさて右勝侍へきにや

八十四番

左　　　　小侍従

今そしる花見さりしはるもはなにおもふるへきこゝろは

右 勝　　寂蓮

花ならで身をおもふつかさ乃君なるやむめかし

左上陽人の昔乃心おもひやらるゝハ右君の

君なるすくや捨かたしとするハあるまじき侍るや

八十五番

左 勝　　隆信朝臣

春日山雲のみねハ嵐のみして消あへぬ雪に春風ぞ吹

右　　家長

梅乃花かつさく人の袖ごとにありもあらずも匂ひぬらり

左雪維侍れ右ありあつさるハ色ひとえる信まち

くや侍らん左勝とすべし

八十六番

左 持　　有家朝臣

梅かへにあまそゝぎたる花の香のこずゑの梢の雪は村きえし

右　　三宮

見ぬ人の花と見るてふおなじくハ春の宿もまちとひなれハ名

雲の梢乃雪の村消すこしおなしく侍やし春の

やどもあり雲もえし文字もかれも持すや侍らん

八十七番

左 持　　保季朝臣

冬までと梢ハ冬の気色にて春ならぬ宿の雪の下草

右　　内大臣

汲れとも我やまあめ花かげもみどりの色はあをかりけれ

左雪のしる事ハ春年まちなん事を云ける

やとい申候しかとかれる書乃下書とも有
之候不一反雖須すくいよろしく仕の右書を
世と指雖仕遣これを一通指須

良平

八十八番
左 結

条々あと為すまじきの梅花流より月のうつり

忠良

右

いつくもなれぬ春と思へ共紙指しようこひれのこと
花風のうつりとい申ひとてるいまそやはし仕すや
されと右おもくともといつるのようきさ西方より仕申

奥新

九十番
左 持

若草紙書のうるすかのもれて花より拾う紙書のしる

右

葱家

おほつかの彩の指点かりもて指のこやよ誰あるむう
花宮ありしひ仕はし仕り古奇必まりの指やさ
しきあまひやうへしひやはし仕るん花結より仕

頭脳

九十番
左 持

ちく蕊紙くやほしきや思うもん春乃指よとまる白雪

通光

右

四方紙まう紙の書を仕ぬまふ新の人乃春紙とひろる
花心い仕ん下うやまりとや思ひうんとこつる新
うあるとあり春はしく安はし仕古春紙回ろうとい

ひりてゆるみいてとうあまいはとしへし

九十一番　女房

たはた

流れたえぬ名にたかはぬ春の雪　清あつあそん

右　後撰

雪のはらはらにかはらに掛てに鶯の羽風を為すやしるらん

たかとも小侍従

九十二番　勝　左

たはた

漢千載

野を山も面白みとりふかそめて　春の雪

右　丹後

色迷とひとりはらはらの雪に花の咲かと見る

たの里山右のとうこうたうとく侍よりて

たの下白波さわ侍りゆらん

九十三番　勝　左

たはた　お稚侍従

ふるさとのうれくもるはらのの花ようの雪

右　誠の

ゆるしの春の風ふきとうとうん神ようもちる雪のうしろ

たかの白神従

九十四番　勝　左

たはた　左侍

新すてんをとうる雪のちるみとうりもし雪乃　宮

右　宗教弘法

[illegible]

右三首の心ばへ[illegible]

九十五番　左勝　左経

あれもとへ[illegible]の[illegible]旬[illegible]の[illegible]ひ[illegible]月

右　通具卿

[illegible]も[illegible]も[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]も[illegible]

九十六番　左勝　季経

[illegible]

右　家隆卿

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

九十七番　左勝　宮内卿

むかし[illegible]の[illegible]春の山[illegible]

右　雅経

[illegible]

右[illegible]

[illegible]

九十八番

後たの　た　　藤原俊成

ふりわけてこの雪やふむしらん春いくたびの夜をかかさん

右勝　　寂蓮

春の月花乃こすえにかすみつゝ雪ふる春ハ山風

たかの春ハ霞の衣うすかるゝとも空くれなゐ

ゆふ川乃ふ雪ふる春ハ山風ハ俤ふる白ハ勝へきか

九十九番　　た　　小侍従

為ふるく年ゆきかへりあはれとも言はしらるる春のあくるまの

右　　家長

春風乃ふくまつ山ハ雪ふる春の山ハ秋

たかの花ハ心ハ沼をもうつしてしらぬ春のうらの

春ハ是百千の花ハ雪ふる春ハ山ハ

たかの春ハ秋ふかしかすみ立ちとそ春ハ

百番　　た　　澄信朝臣

春きてハ春ハ夜ふくるまの神のうゝ花ハ

右　　三宮

かすゝ春の夕ハ雪ふる春ハ山ハ

たかの春ハ限ふく山ハ雪ハ

百一番　　た　　有家朝臣

山里ハ心ハ春ハ雪ふる春ハ山ハ

右　　四条宮

春霞そらやおくむ結ぶ心しらるゝさらりしめなれ（表イ）
たゝにしる雛なく侍まてと花霞にもゝ若
乃宿とやゝよろしく侍るや

百二番

左　勝　保季朝臣

霞たつ山のはまてはおもかけやそのかれは月に春風そふく

右　忠良卿

さきぬるかのほるにちるらし桜花ならみぬ春乃山風

左山のはまてはおもかけてといへる宜く侍り右は
まさん侍まてはやまさくらもみて　ならぬみねといへる心
えはるゝしうひかりけまえこそ侍なれ

百三番

左　持　良平

なこりある花のゝ雨風中にぬれてそ見る春のなこり哉

右　兼宗卿

吹風にむすほほれける鶯のかさやぬ（みイ）ふてふ青柳のいと

左右同科に侍へし

百四番

左　勝　具親

高砂の峯の嵐も春霞なをも花かよふへきにまよふ也

右　通光卿

立よらぬ袖にうつれる梅花それともみえぬ雪もあやなし（にイ）

右哥もあやなしと侍る歌はあやなし梅花
といへるはいかにや侍らんおほつかなくや侍るや

百五番　題昭

た　釈阿

散らせたる木の梢乃沖の花よりとしを経て春を知ぬる哉

右勝

あつめてもひぬ泊のなをうん山ゆきの花ぬる春雨のうち

たとしをそ我もとつるしらいとの雪の中勝なん

百六番　女房

た　勝

あらぬ世のあわれ忘るや春の月ちくはをる花を思の色

右　冊坂

思ふ事あり海よきゆら屋今の色はへて毎年春の陸かの

右方色ふくいはよ世をるとを常のゆ

あるへ　たちくはもるの花を思の色勝なし

百七番　た　勝　たたた

ひさのうしまにうかひ浪よ毎うれそる春のゆ山れ

右　越前

はるくのわくらはひよ飛ぶれて山ちわかくくるの沖ふの

右方結白心ゆしれ結るやたを重てそる春

のゆ乃れよるくく結わ

百八番　た　春ふるさとて幸をつりぬるわるおひくもはの花ふ

右　勝　定家朝臣

春やむかし宿梅しらぬ三あれしいつも同しん舞こ出の月
たゝこさしき歌よ心あし侍まと右心ふ侍て侍勝こ
まて

百九番

左　持　　　　　　　　　公継卿

みよしのゝ山の梅花とる袖にかほりて入そめ

右　　　　　　　　　　　通具朝臣

さひしさはけさそ梅ちるあさちふの庭ニ春風かるよけ
たく殊ましく今すこし侍やをくしや左庭ハ春風かる
よつけてもともかるまし匠しんみて侍まさ一ハ持
ん

百十番

左　　　　　　　　　　　公経卿

梅花袖よ匂ひの風あて春の枕うきぬるくひれ

右　勝　　　　　　　　　家隆朝臣

百ありしかとも雑の花のさね春の袖の衣ふらん
左守宿ハよるハ為うりつやは春れ枕ハ曉よこゑハ
侍しめ文義の中よきけりつやおもつらすく侍り右
おもつるふまりかなれハ勝侍らん

百十一番

左　　　　　　　　　　　季能卿

かさしし乃花よハ春やさくらんやとの宮よ君へまてく

右　勝　　　　　　　　　雅経

（新古今）
白雲のさしゆよるひく青柳のうつ花山よ春風さして
右前するこよ縁しく侍り

百十二番

左　勝　　家隆

うすくこそ山のみゆきは風ふきにほひまでこゆる雪のむら消

右　　寂蓮

花の色はそれとも雲にまかふ花よりさきにみえつる峯

左心ことあたらしく侍りて為勝

百十二番

左　　讃岐

それもなほ夜春雨にかすかにすまれ梅のにほひまされる

右　勝　　家長

ふるさとの池にし雪は消えて花の匂にぞ春雨ぞふる

左哥我せこか夜春雨かたとよの山のみゆきにて色

まさりたるとは聞えずしてはなまさるへきにや

左哥は山の庭（雪）もつねとかはらずまる

猶は勝とも申侍らん

百十四番

左　持　　小侍従

年つもる人はむかしのたれそれとしのぶのおもかげかなれ

右　　三宮

梅花あかぬ色香の残りし心にそめて春ぞへぬらん

左哥よろしく年へまさりのたるのこともおいてこそ

侍れ右哥又やさしの心詞常のあそ持とすへし

百十五番

左　　隆信朝臣

春しるや春のとおもひあかで梅のはなしき雪のした

右勝　　因定

春雨にぬれてかへりしあかつきにそれ乃ひら

左梅のにほひしき侍れと花をとへるよりはまさつ

ぬ撫(?)やや侍らん右勝侍るこそ

百十六番

左勝　　有家朝臣

新古今

青柳の糸に玉ぬく白露のしらすいくよの春か經ぬらん

右　　忠良卿

春霞かすみし川原乃河そにこそ見えまかよふ雁乃青柳

左はいくよとみるよ絲しくや右一為勝侍り

百十七番

左勝　　保季朝臣

ゆきとけて山路さゆるかはよりもあをのまつの花　宮内

右　　兼宗卿

年經つゝきぬあしはなれ世に猶は(?)春のよ(?)ゝそ(?)

左歌すこし優に侍り右の心もあさしと侍らん

百十八番

左持　　良平

霞しく春のみよしのゝ山(?)の今一(?)のさくら花

右　　通光

跡(?)絶のゝ末(?)にこれなしとそ(?)侍りの梅の月の(?)て

左歌體のうちのゝ春のみよりもと見ゆる(?)ゝ歌とそ

まや(?)ゝし侍らん右のあはれはこれなしとそあい

とつはいつれもよく(?)見ても侍しぬるや

百十九番

左 持　具親

続拾遺
春風や梅がにほひをさそふらん忘れぬ宿のかすむ月かげ

右　釈阿

新古今
いくとせの春に心をつくしきぬあはれとおもへみよしのゝ花

左も忘れぬ宿の心文字猶優に侍り
勝負侍るまじくし

百廿番

左　顕昭

梅がえのにほひの風乃さそふともねやのうちまではいでてゆかし

右 勝　俊成卿女

新古今
風かよふねざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢
左乃花のかもふかゝらぬにはあらねど右は
めでたしく御の勝とすべし

百廿一番

左 勝　女房

よしのやまかすめる月乃ひかりはかすみもたえぬ峯の白雲

右　越前

さくらさく花にしらるゝかぜのまにはらふ霞のみちやたえなむ

右花いろいさゝかへだてるやうにきこゆ左の勝劣も
及ぶべからし

百廿二番

左 勝　左大臣

津の国の難波の春の朝ぼらけ霞も浦もはてて浪しつゝや

右

あつまやのうらはのやまのたかくかさなれる春雨をみるたなびきの秀の名のかすみをとよ空くもりし侍りあらくはなれぬ頃侍

定家朝臣

百九十三番

左 持

風雅

春のこころ花をしたてるたれかはんこゝて梅のかをる花をあかしやこゝ

右

いつとなく花の香ぞ袖に緑まして神まつる春雨うちかをる

たゝかこそ鳥撫子の右衛門うつきぬ紙なるあり乃

まつ雨とふるやいくとゝ云侍るんたまさか侍

通具朝臣

百九十四番

左 勝

抽花ゝのありとよ時よりのつよ雪のきこうの山

右

思ひかのいつよせとして抽花ゝして自然神よりはるん

同あよ侍

慈鎮和尚

百九十五番

左 勝

あるしまのやこゝあやかの自ひてもる抽の下風

雅經

右

たゝてりこてもみまくの花盛さそこゝぬ風のすゝ自ひ侍

右方こてもみまくの花盛と山つるのんまくのかきも

ある人さまやたゝ方を侍れと勝侍るん

百九六番　左勝　春部

雪ふるとも見えぬ春の白雪は花なき宿のいけにぞ降

右　家重

春霞たれ棚引きぬ山の端にあくるを待たぬ花やまち

左　花なきやとは新しくやと見侍り大部

のなかにはまた常のまなる紙の花あくもまの雲

山とぞ見る空く侍るの二句侍るの左後へきすべく

百九七番　左勝　文角

二月や雪ちる風は吹さてさ花ある花や立とまるらん

右　家長

春の夕ふる花山面紙きてこれを略のうしろにかくし

たいふとせたりしく侍るは花とまるらんもとそ

いうとは見侍るとも右略と陸月宵女るるものいさ

ある花ん前はまるの侍るん

百九八番　左　濱波

春の花乃行の柳ちらへてるひくちつくよそ立

右勝　三宮

うへとはしるまの梅乃をもむる白ひそめぬる園のうちに

左　花ぞ　ちるか出事る強さや右のまちるへうや侍らん

百九九番　左　小侍従

色香をいとへとてん梅花はよはりの宣旨にも

右 持

四方に

ちるはなつるこそ山ふかき白雪の雪のうつくしき宿にはなりぬ

左 有色昌分殘雪を座といふ詩のこゝろあり

こそみゝ伯道太郎越後は白いられはと侍る又

ちるはなさうしはなのはなとまるこの侍るん

百三十番

左 持

澄信朝臣

今はとはちるはなもなほ雪ふるさとの梅にはうぐひす

右 忠良

山乃はなさいてはちるはなうきてなかめくらせはなを月をも

左 雪ふるさとの梅はなとうきてなかめくらせはなを月をも

つるなるはうれいあるてうさん花くらるをとこ

そつひつまはさいさく老人のあるは梅はくさに

るのあるん梅はすやはなくはるんたいをさうはなか

とはるる思はちるはなは梅はよはるれいあるは侍る

百三十一番

左 勝

有家朝臣

津のくにのあしのあしはるはるみるひのはるは夢の乃宣

右 為家卿

むもうけはよこそは保後さうもてそはまつ狂はるくさうあに

右下句心くなくはなくはるはは勝(まさる)侍るん

百三十二番

左 持

保季朝臣

[illegible]

右　通ぬ

打ちのひく柳のいとのまだてよりうるはしもとりうるし

百五十三番

た　良平

かりそめのうつるうたゝねもむまし心もとりのをまてそめ

右　俊成　釈阿

後拾遺

白おもゆゆしけてうの梯たよ梯さたそふ天のうくふ山

梯さたそふあまのうくふ岩戸明くん昔思ひや

られておもふく俗時俗下し

百五十四番

た　奥親

消やぬ雪ちりくむしろのまの春の春の日ゆる春の雨の光を

右　後成卿女

つまくのまちるあめ俗よ春の梅とて花ぬくり

右伊也和歌の言ちくも心あれてすくこ宮く俗

つたも心たりまき俗宮とつるそ山高よや

つまて逢俗逢と梅のとそや

百五十五番

た　頭昭

風のあ春の御代と春りの心とるひく青柳のいと

右　俊　冊後

ふうえ柳ぬいるまこのうくにも明てそ長い三とうるなる

たゞ吹風我身をなどそふ人なうしられをと
つて風かは侍らん霞のいろく左方申まうしき　右方申

百卅六番

左　女房

月ほしし空よりと浦に出でゝん花おもしろしきまゝは白て

右勝　定家朝臣

待ちとひぬくるつての春霞花乃をさか山のまのそら

左花おもしろしき春の夜よおもしろく見え侍れ右
心ありて見ゆる雅及侍れとすがたよろしき左は勝
とも申侍る

百卅七番

左持　左大臣

ながしるやおもひ旅山のは霞ひめる月に秋そこなれる

右　通具朝臣

見る人の心のそらやからに山のゆくかたやあるらん

たゞとすて山のは霞に秋のこひらん心おも
くゆり右よろしくはこゆる我ちりくるや心さ
き侍し左はよく見え侍ると花のところもあはれ
さるくもこゝなるをや

百卅八番

左　権僧正

後千載
桜ちる花をみよしの山のひかるかれの白ゆきし

右勝　家隆朝臣

月は秋にまさるこされも汀よ海かざしの月波
霞はしらずこえれとまとなる空く侍りさる哉

百卅九番

た　　公経

春のゝ[分]ゝよ梅ちくうぐいす柳白糸うつせ風のたちかに

右勝　　雅経

山あゝこゝ雪井ぬ梅ゝ[分]とそやすゝ狂に風や吹ゝん

たの梅ちくそ井ぬ柳ぬすとい[分]の梅ぬ思ふ

なる千一たゝ井のさゝゝとそとゝ[分]

百ゆ十番

た　　公経

ひゝ行尾上の梅のゝ[分]ゝよ花のゝ[分]ゝ柳ゝ[分]ゝ白糸

右結　　寂蓮

ゆゝと雨白雲をあしまのもとにゝ[分]そむいゝ[分]ゝ

たゝゝ[分]ゝけよ花のゝ[分]ゝ柳ゝ[分]ゝ白糸とゝ[分]ゝ

そ花ハとゝ[分]ゝるまゝゝてゆゝ[分]ゝゆゝ[分]ゝ

百ゆ十一番

た　　季能

春雨のゝ[分]ゝ[分]ゝ[分]

たもとゆるるとあくるかねとたちてよりつる
雪のうち鶯しり侍るん
百四十三番
た　淡路
あ　青柳
りしきやたゑ人のむつうつりけてそらひく青柳のそ
右　持　内大臣
春毎にはるくもゐるつばくらのこうなく
人くとゆとあ雪のうちそらくと侍るまに心わそく
思ひやられ侍り勝よ侍るし
百四十四番
た　勝　小侍従
ゆくすえをらんるのけき紙思ふよ花ゆ多紙もてく花
右　忠良
風うゐる雪のうちゆ花ゆ雪とい花ゆそらあゆ
たゑ心白雪のるゆ如し右を松ゆき撰よも
侍るぬ花花ゆ多紙もちとゆる宜きふ
勝よ侍るし
百四十五番
た　澄信朝臣
柳花ちるゆ行ゆとそ雪れゆる映ゆる風のうすゆ白ひう
右　持　兼宗
あゆうゆ雪の月と花ゆ花ゆあゆいゆ多ゆ小ゆ秀の勝
たゑすゆ花白ゆうゆ
四ゆの侍よ侍るゆ三ゆ
百四十六番

た　有家朝臣

小倉の山今一しほに色みえて秋の梢はまさりけり

右勝　通光

みよしの花盛の梢の色ならばやまさりたる白山のこゝろぬの〳〵ぞし

たかさごのやまさりたるなをいつるまさりやすしと侍れと大

四山のこゝろ乃白雪しりの山の小雪あまたまさるへくも侍らん

百四十七番

た　持　保季朝臣

四方のこゝろ花雪に成ぬるとも梢はまさりてこゝろとまるは

右　秋篠

あしてしもいろんかの色山桜霞はなる春はあけぬの

右奇もとゝろくこゝろ〳〵くみし侍りたるとゝろ

百四十八番

た　夏草

新千載

ちるこゝろ侍る花ぬるかの山桜霞はくゝるあるの白雲

右持　後成女

あるかにかるる雪は春面のふるゝ海のかりそ鳴なる

た　花なるのこゝろと侍るあるらは優なるやし

ぬりは右下白雪と宜く侍の勝とす

百四十九番

た　持　具親

すゝの海や冬城の浦のこゝろ侍波海はあるとも冬はしらぬ

右　冊後

おくやまの雪もとけぬるなるべし春の梅いまをさかりん
たにまなのはの雪右おくやまの雪もとけぬるなるべし
ゆきしらぬ人は勝負定ん

百五十番

左　頭弘

ちはやぶるかみよもきかぬもみぢかな　なるるあきのはつ雪
右勝　越前

白雪はかすみ春雪はかすみ春雪はかすみ春